

あゆみ通信

VOL.132

あゆみの会（真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

仏弟子同窓会の あゆみの会総会にご参加を



第2組報
恩講に、本
山の報恩講
が、11月2
1日から28

日まで厳修され、いろいろあつた1年も終わろうとしています。

あゆみの会も、多くの皆さんのお力添えで、おかげさまで、何とか仏弟子として共に手を携えて、12月には12回目の総会を開催することができま

す。振り返れば、2008年12月21日(日)に、即応寺(当時は藤井前隆住職)で16名が集まり、竹内組長、藤原副組長立ち合いで産声を上げました。



結成した2008年は北京オリンピックや、世界では紛争が相次ぎ、またミャンマーや中国四川大地震など災害が発生。

9月にはアメリカでリーマンショックが起こり、世界経済を揺るがし、11月にはアメリカではじめてアフリカ系アメリカ人のオバマ大統領が誕生した年でした。

2007年の第2組では、2011年に本山あげて実施される宗祖親鸞聖人750回御遠忌に向けて大阪教区が力を入れるプレイベントの推進員養成講座推進の動きに呼応して、10年ぶりに2組上げて、取り組んだもので、当初は20人を超える参加となりました。

前期講習は5回で、二組の各寺院を会場に、スタッフも住職や坊守さんに青年住職の皆

さんなど30名がお世話をしてくださっていました。

そして翌2008年6月の本山での後期講習を、6月16日に18名が御影堂の親鸞聖人の前で宣誓して修了いたしました。

最後の座談会で、Fさんが「一緒に仏弟子になったことだし、このまま解散は寂しいので、皆で同窓会でもしませんか」の声に、全員が賛同し、解散しました。



以後、お手次のお寺での聞法や、二組の行事に参加しながら、あれこれ過ごしていましたが、8月ごろ、参加の多かった法山寺と即応寺の有志が話し合い、何回かの会合の上で、12月に準備会として、第1期の皆さんにも声掛けをして、立ち上げることで「あゆみの会」がスタートしました。

浪花博会長など役員や会費を決め、事業は総会も含めて例会3回と年4回集まることにしました。

その右も左もわからない私たちを、積極的に相談に乗り、



実際に指導してくださったのが即応寺の藤井善隆住職(当時)でした。

折から大阪教区で発行された「まんが親鸞聖人」を教材として、解説してくださるのを主な聞法活動にしました。(つづく)

(写真は結成総会のものです)

大推協公開講座

大推協(会長 細川克彦)では、昨年に続き公開講座を開催されます。ご都合がつかれる方は、ぜひ、ご参加ください。

日時 12月16日(月) 午後2時
会場 難波別院 同朋会館講堂
内容 法話
講題 信心よろこぶそのひとを
講師 澤田 秀丸先生

(第12組 清澤寺前住職)
参加費 無料

あゆみの会総会

日時 12月22日(日)
午後1時30分

会場 法山寺(阿倍野区天王寺町)

内容 協議事項(報告と計画、予算案)その他、懇親会
法話講題「立教開宗」

講師 藤原 智先生

(真宗大谷派教学研究所助手、法山寺衆徒)

終了後、茶話会懇親会

参加費 無料

その他 2020年年会費
(2000円、ただしご夫婦
会員3500円)受け付けま
す。お待ちしております。

生かされている いのち

教育者で宗教者の東井義雄先生の言葉に「生かされているいのち、願われているいのち」「父母をはじめ、目には見えない大いなるものなどによって生かされ、願われている」と。

今年、11月に79歳という人生の節目で、この言葉を改めて、かみしめている。

親鸞聖人の教えに本当に出会うまでに、暗中模索の人生であった。今でも、在職中のあれこれについて、夢を見てうなされることがある。

その時に、藤井善隆前住職にお聞きした、「仏のモノサシ」

を思い出しては、立ち止まって考えなおすことがある。これができるのも、自分の心の奥深くにある法蔵菩薩の呼びかけであろう。「お前、それで良いのか」折れそうになる心を、いつも励まされて1年を終わる。(本)

2組報恩講執行



2019年11月14日(木) 午後5時30分から、阿倍野区即応寺(藤井真隆住職)において、2組合同の報恩講が、組内の住職や寺族や門徒・推進員37人が参加して執行されました。

海老海恵幸組長(了安寺住職)の開会挨拶の後、正信偈真四句目下、念仏讃洵五、和讃「五十六億七千萬」次第六首、回向「願以此功德」が力強く勤修されました。



そのあと、講師に竹中慈祥先生(長浜教区眞廣寺住職・難波別院法務部長)を迎え、「真について」という講題でご法話をいただきました。時々、参加者の笑いを誘いながら、私たちには真(まこと)は無いこと。偽(いつわり)と仮(かり)しかないことをご自身の失敗を例に引きつつ、話されました。

最後にお齋を皆でいただいた後、同朋総会が開かれ、法話についての感想や、お寺への要望などの意見が出されま



真の言は偽に對し、仮に對するなり

した。竹中先生からは、新しく建てられた難波別院山門(上層部ホテル)についてのお話をお聞きしました。最後に、中嶋ひろみ門徒会会長より閉会の挨拶があり、解散しました。

(レポート・写真=細川克彦)

如是我聞

佛足寺 細川 克彦

竹中先生は

「真(まこと・しん)について」という講題で

「教行信証」信

巻から「『真仏

弟子』というは

『真』の言は偽

に對し、仮に對するなり」

(「聖典」245頁)を引かれ、

私たちに真はあるのでしょうか、偽(いつわり)と仮



(かり)ばかりではないでしょうかと切り出された。たとえば、「偽」の例として、迷信といわれるものをあげられる。

「夜、爪をつんだら親の死に目に会えない」とか、「友引の日に葬儀をしたら、人を引っ張る」とか「中陰が三月にまたがったらいけない」これらは根拠もないのに、守らなくてもいいのだろうかと思う。また「仮」というのは、例えば「一日一善」とか「いつも笑顔で」とか、出来もしないことで、いい結果を得ようとする。この「偽」と「仮」は外道(仏教ではない)と言われる。

しかし、考えてみると、私たちは日頃、これらばかりやっ



2019. 11. 28 本廟 報恩講

ているのではないか。また、これは從因向果(因から果へ)と言われ、どんな縁があるかわからないのに、私たちは結果を決めてかかろうとする。

これに對し、從果向因(果より因へ)というのは、聞法がそれで、今の自分がどのようにして成ったかという、果から因をたずねていくことであり、日頃、偽であり。仮でしかない自分を知らされていくことである。

訓覇信雄(くるべしんゆう)

師(元真宗大谷派宗務総長)の著作「死して生きる」から、ある女性が、次男の死縁となって、信心が欲しい安心の日暮らしをしたいと一生懸命聞法を始めたが、父親から聞法して何かいい者になるのではない。お粗末な自分ではしかなかった(偽や仮でしかなかった)ということにふっと「気づかされた時、頭が下がる。そこが仏様の世界や」と教えられ、はっと目が覚めたというお話を紹介された。わかってても、わからなくても、法蔵菩薩が用意してくださった「南無阿彌陀仏」を称えさせていただく。私たちは偽でしかなかった。仮でしかなかったと頷いていくところに、よくわかりませんけれど、「真」が現れてくださるのではないのでしょうかと、熱く話された。(この1年間、多くの方に助けていただいて、「あゆみ通信」を出し続けることができたが、ほとんど毎月のように、レポートと要約をいただいた、細川克彦氏には深く感謝する次第である。ありがとうございました。【本】)